十三・四世紀におけるモンゴル軍のインド侵入

恵谷　俊之

【要約】十三世紀初葉のチンギス・ハン麾下のモンゴル軍の侵入に始まり、その後十四世紀にかけてモンゴル族は西北インドへの侵入を繰り返した。第一回の侵入は、フォーラズム朝の打倒と東西交通路幹線の占有権の確保を主目的とし、たまたまフォーラズム王が南走したのを追撃してインダス河畔に達したのにすぎなかったが、やがてチャガタイ汗国の成立とともにインドに対して本格的な征服戦を展開し、デリーのスルターン政権（Delhi Sultanat）の背後を脅した。本稿はその経過を跡づけ、あわせてその史的意義を検討しようと試みたものである。

史林　四八巻五号　一九六五年九月

一　序　言

十三世紀の初めモンゴリア高原に部族統一を完成したチンギス・ハンは、まず西夏を滅した後、当時華北を領有していた金朝に対する征服戦を開始するとともに、西方に注意を向け、やがてオトラル事件を契機として大規模な遠征事業に乗り出した。モンゴル軍はまずカラ・キタイの旧領土を占領した後、シルダリアの線を越えて西トルキスターンに進出したが、当時この地を領有していたフォーラズム帝国と激しく衝突した。モンゴル軍はフォーラズム・シャー・スルターン・ムハンマッドの軍を破り、彼をカスピ海の一孤島に蒙塵を余儀なくせしめ、その子ジェラール・ウッディーンを追跡してインダス河畔で決戦を挑んだ。モンゴル軍が初めてインドに姿をあらわしたのはこの時であった。チンギス・ハンの率いるモンゴル軍の本隊はやがて短日月の後、引き上げたが、その後、約一世紀にわたってモンゴル軍は繰り返し西北インドに侵入し、当時北インドを支配していたデリーのスルターン政権の背後を脅した。

本稿はこのモンゴル軍の侵入をめぐって、当時の西北インドの事情を捉えることを目的とするものである。

二　インダス河畔のチンギス・ハン軍

さて、チンギス・ハンの西域遠征は直接にはオトラル事件に端を発したといわれているが、もちろんそれは当時、東部イーラーン・ホラーサーンから西トルキスターンに領土を保有し、内陸アジアの心臓部をおさえていたフォーラズム帝国と東方の新興勢力モンゴルとの東西貿易路の占有権をめぐっての争いであったとみるべきであろう。

チンギス・ハンの西域遠征の記事は元史には太祖十四年の條からみえている。

〔十四年、己卯〕夏六月、西域殺使者、帝率師、親征、取訛答剌城、擒其酋哈只児只蘭禿、①

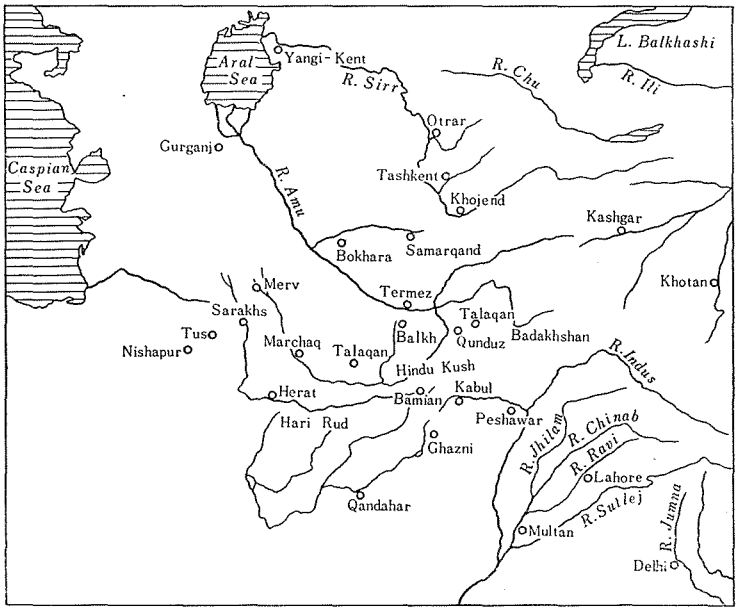
訛答剌はいうまでもなくオトラル（Otrar）であり、哈只児只蘭禿は当時フォーラズム・シャーの任命していてオトラルの太守ガイル・ハン・イナルチュク（Ghayir Khān Inal-chuq）を指すものと考えられ、ガイル・ハンがモンゴル側の使者を殺害したのに対し討伐のため太祖自から兵を進め、この地を攻略した次第を述べたものである。これに続いて元史本紀は、

十五年庚辰、春三月、帝克蒲華城、夏五月、克尋思干城、駐蹕也石的石河、秋攻斡脱羅児城、克之、②

と記している。蒲華は Bukhārā、尋思干は Samarkand、也石的石河は聖武親征録の也児的石河で③ Iltish 河、斡脱羅児は Otrar を指すと思われるが、元史の記述に混乱があり、オトラル攻略が繰り返し述べられている他、次の十六年の條にもふたたび卜哈児（Bukhārā）、薛迷思干（Samarkand）攻略の記事がみえる。

十六年辛巳春、帝攻卜哈児・薛迷思干等城、皇子朮赤攻養吉干・八児真等城、並下之、夏四月、駐蹕鐵門關、……秋帝攻班勒紇等城、皇子朮赤・察合台・窩闊台分攻玉龍傑赤等城、下之、冬十月、皇子拖雷克馬魯察葉可・馬魯・昔剌思等城④、

養吉干はシル河下流の Yengi-kent、八児真は Barj-ligh-kent、班勒紇は Balkh、玉龍傑赤は Gurganj、馬魯察葉可は Maruchaq 馬魯は Merv、昔剌思は Sarakhs を写したものであり、元史は続いてトゥルイの東部イーラーン・ホラーサーン地方への進撃を述べ、



西トルキスタン・アフガニスタン略図

十七年壬午春、皇子拖雷克徒思・匿察兀児等城、還經木剌夷國、大掠之、渡捌捌闌河、克也里等城、遂與帝會、合兵攻塔里寒寨、拔之、……夏避暑塔里寒寨、西域主札闌丁出奔、與滅里可汗合、忽都忽與戰不利、帝自將擊之、擒滅里可汗、札闌丁遁去、遣八剌追之、不獲、⑤

と記しているが、徒思は Tus、匿察兀児は Nishapur、木剌夷は親征録の木剌奚で⑥ Mulahida(?)、捌捌闌河は Hari-Rūd(?)、也里は Herāt、塔里寒は Taliqān であり、チンギス・ハンが塔里寒寨を攻略し、附近の山地に夏の幕営を設けていたときファーラズムのスルターン・ムハンマドの子ジェラール・ウッディーン（札闌丁 Jelāl-ud-Dīn）が部下のハン・マリク（滅里可汗 Khān Malik）とともにシギ・フトフの率いるモンゴル軍と戦い、後者を破ったという報せが入った。当時ホラーサーンより帰還したトゥルイ、フワーラズムより帰還したチャガタイ・ウゲティの軍と合して、直ちにジェラール・ウッディーン討伐に急行した。親征録はこの事件を、

時西域速里檀札蘭丁遁去、遂命哲別爲先鋒、追之、再遣速不台・拔都爲繼、又遣脱忽察児、殿其後、哲別至蔑里可汗城、不犯而過、速不台・拔都亦如之、脱忽察児至、與其外軍戰、蔑里可汗懼、棄城走、忽都忽那顔聞之、率兵進襲、時蔑里可汗與札

蘭丁合、就戦不利、遂遣使以聞、上自塔里寒寨、率精鋭親擊之、追及辛自速河、獲蔑里可汗、屠其衆、札蘭丁脱身入河、泳水而遁、遂遣八剌那顔、將兵急追之、不獲、因大擄忻都人民之半而還、⑦

と記している。ターリカーンより急行したチンギス・ハン麾下の精鋭はヒンドゥークシュ Hindūkush を越えて（シバル峠を越え、バーミヤーンを経て）、一旦ガズニーに出、そこから（カイバル峠を越え）ペシャーワルに進出し、ジェラール・ウッディーンの軍とインダス河畔で会戦したと思われる。元朝秘史もこの戦の有様を、

ヂェベ（者別 Žebe）、スゥベーティ（速別額台 Sübegětei）、トフチャル（脱忽察児 Toqučar）の三人をジェラルディン・ソルタン（札剌勒丁涉勒壇 Žalaldin Soltan）、ハン・メリク（罕篾力克 Qān Melig）二人の後から入れて、かえって彼らを破って殺した。ブハル（不合児 Buqar）、セミスカブ（薛米思加卜 Semiskab）、オトラル（兀答剌児 Udarar）の城に彼らを合わせないで、勝利をえつゝ、シン河（申沐漣 Sin müren）に到るまで追跡したとき、シン河に跳込んだ。多くのサルタグル（撒児塔兀里 Sartaiul）たちはそこでシン河で殺戮されたのだ。ジェラルディン・ソルタン、ハン・メリグ二人はその命を全うしてシン河を遡って逃れた。チンギス・ハガン（成吉思合罕 Čingis Qaγan）はシン河を遡って去り、バドケセン（巴惕客先 Badkesen）を掠め去ってエケゴロハン（額客・豁羅罕）、ゲウンゴロハン（格温・豁羅罕）に到って、バルアン・ゲール（巴魯安・客額児 Baruγan-Keger）に下馬してジャリジャルタイ・バラ（札里牙児台巴剌 Žalijartai Bala）をジェラルディン・ソルタン、ハン・メリグ二人の追撃に派遣し、ジェベ、スベーティの二人に大いに恩賞を与えた。⑧

と記している。ラシッード・ウッディーンの「集史」、ジュワィニーの「世界征服者の歴史」⑨、ミンハージ・ウッディーン・ジュズジャーニーの「ナーセリー物語」⑩など、ペルシャやインドの史家たちもこのインダス河畔の戦いを生々と描写している。今、ラシッード・ウッディーンの記載を訳出してみると、

そしてガズニー（Ghaznin）に到着したとき、すでに十五日前にスルターン（Sulṭān Jelāl-ud-Dīn）はシンド河（āb-i-Sind）を渡る意図をもってここを出奔したことを聞いた。チンギース・ハーン（Chingīz Khān）はバーバー・ヤルアジ（Bābā Yaluaj）をこの地の総監（Shaḥnagī）に任命し、可能な限り急いでスルターンを追跡し、渡河に備えて河岸に舟を集めさせた。オル・

ハーン（Or Khān）が指揮する後衛軍はモンゴル軍の前衛と交戦し、敗北した。チンギース・ハーンはスルターンが翌暁を期して渡河しようとしていることを偵知し、機先を制して夜中疾駆し、翌日早暁彼（スルターン）の前後を捕捉し、モンゴル軍はあらゆる側から包囲した。そして彼らは幾重にも環をなして互にその後に立並んでまるで弓のようにし、シンド河を弓弦のようにした。太陽が昇るや、スルターンは自からを水と火の間に見出した。そしてチンギース・ハーンは次のように命令した。汝らスルターンに矢を放たず、全力を挙げて彼を捕虜にせよと。そしてオカル・クルジャー（Okar Qulja）とクトル・クルジャー（Qutur Qulja）を派遣し、岸辺より追跡せしめた。彼らは二人とも全力を尽した。岸辺でスルターンの軍隊が行軍するのをみた。その後、モンゴル軍は攻撃をかけた。そしてハーン・マリク（Khān Malik）が指揮する右翼と彼らの前衛を殺戮した。そしてハーン・マリクはペシャーワル（Peshāwar）の方向へ敗走した。モンゴル軍は途上で捕獲した。そして彼を殺害した。そして左翼をも壊滅させた。スルターンは七百人の歩兵からなる中堅を守った。そして明方より正午に至るまで、軍勢は対峙した。あたかも心が身から抜け出したようであった。左と右より前進せしめ、中堅を攻撃した。そして法令（Yāsā）どおりに彼を矢で射ずに半円型の包囲陣を狭ばめた。そして彼は獅子奮身の勢いで戦った。抵抗の限界を悟ると岸辺で最後の突撃を試みた。かなり遠方で乗馬に跨がった。そしてモンゴル軍に攻撃を加え、彼らを背進させ、逡巡させて、馬首を廻らせ、胴甲を脱ぎ捨て、自からの楯と標旗を掴んで馬に鞭うち、江波にきらめきがあらわれると、その方へ向って跳び降りた。そして刀剣を水上にかかげた。チンギース・ハーンは驚嘆の極み、手を口にあて、彼の息子たちとともに見守った。そして云った。このような息子にはしかるべき父があるに違いないと。そしてこのようにして戦場と江流より離脱し、対岸に上陸することができた。彼については無数の行為と無限の驚嘆が生れた。モンゴルの兵士たちは彼が江流に跳び込んだのをみて、彼を追って自から水中に跳び入ろうとしたが、チンギース・ハーンは制止した。そしてスルターンの軍隊を全滅させた。そして彼の家族の男子を乳幼児をも含めて全てを殺した。そして彼のハレムの貴重品を略奪した。そしてスルターンの財宝は大抵金貨と宝石、貴金属であったが、当時全てをシンド河中に投じたと云うことである。その後チンギース・ハーンは潜水業者に命じて潜水させ、その主なものを収得した。そして戦利品を慣習に従って分配した。[11]

とあるように、ファーラズム軍はここに決定的な打撃をうけ、ジェラール・ウッディーンはかろうじてインダス河の急流を泳ぎ渡って逃亡することができた。この戦場は恐らく、今日のペシャーワルの東南方、インダス河本流にパーキスターン北・西鉄道(North-western Railway)の鉄橋がかかっているアトック (Attock) 附近であったであろう。

さて、こうして逃亡したファーラズムのスルターンは東南に向い、当時北・中インドの支配権を握っていたデリーを首都とするトルコ系イスラーム政権、奴隷王朝のスルターン・イルトゥトミシュ (Iltutmish) の許に走った。「ナーセリー物語」の著者ミンハージ・シラージ・ジューズジャーニーは、

その後、六一四 A. H. (一二一七年四月十日～一二一八年三月二十九日 A. D.) にシャムス・ウッディーン Shams-ud-Dīn〔イルトゥトミシュ〕はマリク・〔スルターン〕ナーシル・ウッディーン・カバージャ (Malik Sulṭān Naṣir-ud-Dīn Qabājah 当時のシンドの領主) と戦闘を交え、後者を破った。そしてモンゴルのチンギース・ハーンが侵入した結果、ホラーサーン (Khurāsān) に悲劇が訪れたとき、すなわち六一八年 A. H. (一二二一年二月二十五日～一二二二年二月十四日 A. D.) にスルターン・ジェラール・ウッディーン・ファーラズム・シャーは異教徒の軍に破れ、ヒンドゥースターン (Hindūstān) の方へ逃れた。フワーラズム王国の騒擾はラホール (Lahūr) にまで及んだ。そこでスルターン・シャムス・ウッディーンはヒンドゥースターンの軍勢を率いてデリー (Dehlī) からラホールに向った。スルターン・ジェラール・ウッディーン・ファーラズム・シャーはヒンドゥースターン軍との衝突を避け、シンド (Sind) とシーヴェスターン (Sīwestān) に向って去った。[12]

と記していて、ジェラール・ウッディーンはシンドを経て、ペルシァに逃れた。[13]

一方、チンギス・ハンはインダス河畔の戦いの直後、軍をかえして北上したが、部下の将軍バラ・ノヤンらを派遣してジェラール・ウッディーンを追跡せしめた。ラシッード・ウッディーンはさきに引用した箇所に続いて、

その後、チンギース・ハーンはジャラーイル (Jalāir) 部出身のバラー・ノヤーン (Bala Noyān) と……部出身のドゥルバーイ・ノヤーン (Durbāy Noyān) の両者に軍兵を授け、スルターン・ジェラール・ウッデイーンを追跡してヒンド (Hind)

地方へ派遣し、彼を探し求めんがために行かしめた。そして彼の足跡をついに発見しえず、ヒンドゥースターンの都市の一つ、ビア（Biah）城塞を陥落させ、カマル・ウッディーン・ケルマーニー（Qamar-ud-Din Kermānī）を捕えた。またスルターンの軍隊の将校の一人を捕虜にした。そしてムルターン（Multān）へ向って強行軍を行った。そしてムルターンには弩砲の用にあてる石がなかったので、石柱を探し、これを河水の辺に求め、ムルターンに運搬した。かの地へ到着したとき、弩砲の準備は完了した。まさに占領しようとしたところ、滞在を拒む暑気がやって来た。そこでムルターンとラホールとペシャーワルとマリク・プール（Malikpūr）市を劫掠してシンド河を渡り、チンギース・ハーンの幕下に合流した。[14]

と記している。バラ・ノヤンらのモンゴル軍はジェラール・ウッディーンをついに発見しえず、ラホール、ムルターン、ペシャーワルなどのパンジャーブ・シンド地方の諸都市を劫掠した後、引上げた。その後、モンゴル軍は、親征録に、

癸未春、上兵循辛目連河而上、命三太子循河而下、至昔思丹城、欲攻之、遣使來禀命、上曰、隆暑將及、宜別遣將攻之、夏上避暑於八魯彎川、候八剌那顔、因討近敵、悉平之、八剌那顔軍至、遂行至可温寨、三太子亦至、時上既定西域、置達魯花赤於各城、監治之、甲申、旋師、住冬避暑、且止且行、乙酉春、上歸国、自出師至此凡七年。[15]

とあるようにインダス河辺より北上し、三太子ウゲティはシースターン（昔思丹 Sistān）の攻略に向ったが、暑気のため引返した。パルワーン（八魯彎 Parwān）に夏の幕営を設け、やがて北上してアム河を渡り、サマルカンドに着き、占領した地域にダルガチ（達魯花赤、ラシッードの Shahnagān）[16]を任命してモンゴリア本土へ帰還した。なおラシッード・ウッディーンやジュワィニーは、チンギス・ハンがインド・チベット経由でモンゴリアへ帰還しようと試み、気候と地勢に阻まれて断念したという記述を伝えており、[17] ジュズジャーニーはこのときデリーのスルターン・イルトゥトミシュとチンギス・ハンとの間に前者の領土の通過許可をめぐって書翰がとり交わされたと伝えている。[18]

こうして第一回のモンゴル軍のインド侵入は終りを告げたが、このときのモンゴル軍の主目的はファーラズム・シャー打倒にあり、インドに侵入したのは、たまたまファーラズム・シャーがパンジャーブに逃れたのを追跡したまでで

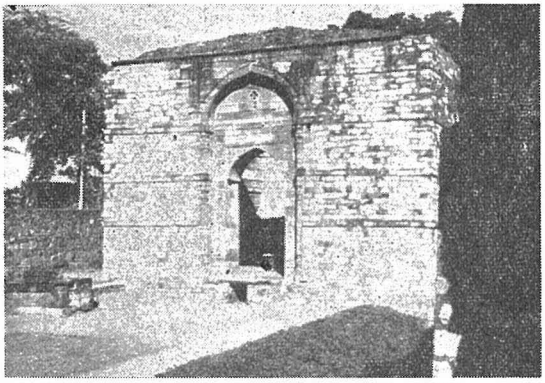
あったといえる。

次にこのインダス河畔における両軍の対戦の紀年についてであるが、元史と親征録は太祖十七年壬午の条に記録しており、ペルシァのラシッードも午の年、回暦六一九年（一二二二年二月十五日～一二二三年二月三日 A. D.）としている。（なお、元朝秘史にはこの戦の紀年は示されていない。）ところが、長春真人西遊記に「〔辛巳歳十月〕西行七日、度西南一山、逢東夏使回、禮師於帳前、因問来自何時、使者曰、自七月十二日辭朝、帝將兵追算端汗至印度[19]」とあり、辛巳の歳（一二二一 A. D.）七月十二日にチンギス・ハンの許を去り帰途についた使者と出会い、使者の出発時にチンギス・ハンはジェラール・ウッディーンを追跡してインドに入ろうとしていたという記事がみえている。長春の記録はチンギス・ハンに直接謁した人のそれであるとともに、その紀年は同年五月朔の日蝕の記事によって間違いないと思われる。王国維[21]、那珂[22]、岩村[23]の諸氏が元史、親征録の壬午の記事を一年繰り上げて辛巳とされる理由である。ところでペルシァの記録をあたってみると、ラシッードはなるほど午の年にかけているが、ジュワィニーの「世界征服者の歴史」は、インダス河畔の戦を叙述したあと、「この事件は運命の不思議の一つであるが、六一八年のラジャブ(Rajab)月に起った[24]。」と記していて、それは、西紀一二二一年の八月二十一日から九月十九日にあたり、長春真人の記録を裏づけている。長春の七月十二日は西紀では一二二一年八月一日にあたるからであり、八月初めにヒンドゥークシュを越えて南進し、同月末頃にインダス河岸に達したと解すればよい。また、ジュズジャーニーの「ナーセリー物語」に、「六一八年にモンゴルのチンギース・ハーンの侵入の結果、ホラーサーンに悲劇が訪れたとき、ジェラール・ウッディーン・フォーラズム・シャーは異教徒の軍に敗れ、ヒンドゥースターンの方へ退却した[25]。」とあり、著者のミンハージ・ウッディーン・ジュズジャーニーは当時、直接この事件に遭遇した人物で、しかも六二二 A. H. にデリーのスルターンに命ぜられて自からゴール地方からクーヒスターンに旅行しており、六五八年 A. H. ラビ・ウル アッヴァル Rabi-ul-Awwal 月の五日（一二六〇年二月十九日 A. D.）に著作した[26]本書は信憑性が高いと思われるからである。こうして王国維氏、那珂氏、岩村教授らの一年繰上げ説はペルシァ側の記録に

よっても裏づけることができた。

三　モンゴルとデリー・サルタナット

すでに述べたように一二二一年のモンゴル軍の侵入は彼らのインド侵入のいわば前奏曲であって、それはこの後、十四世紀にかけて十数回にわたって繰り返され、当時の北・中央インドの支配者デリー・サルタナットの背後を脅し、歴代のデリーのスルターンたちにとって西北辺境におけるモンゴル人の侵略行動をいかにしてくい止めるかが、かれらの最も重大な課題の一つとなった。当時のインド側の年代記を調べてみると、まず一二四一 A. H. に、当時イルトゥトミシュの歿後、スルターン位を継承した彼の娘ラジィヤ（Raziyya）を廃して王位についたバフラーム（Bahrām）の治世中であったが、モンゴル軍の侵入をうけた。



イルトゥトミシュの墓（ニューデリー南郊）

スルターン・ムイズ・ウッディーン・バフラーム・シャー（Sulṭān Mu'iz-ud-Dīn Bahrām Shāh）の治世中に起った悲劇の一つはラホール市の事件で、異教徒モンゴル人の軍隊がホラーサーンとガズニーの方面から市に殺到し、相当の期間戦闘が継続した。ラホールの知事はマリク・イフティヤール・ウッディーン・カラー・カシュ（Malik Ikhtiyār-ud-Dīn Qarā Qash）であった。彼は生れつき非常に勇敢で精力的で大胆で恐れを知らない人物であったが、ラホールの市民は一致協力すべきときにまとまらず、戦闘に、夜警に、おろそかな点が多かった。その配備が明らかになったとき、マリク・カラー・カシュは彼の手持の軍隊に行動を起させ、夜陰に乗じて市から撤退し、首都デリーの方へ向った。異教徒モンゴル人たちは彼を追跡したが、神の恩寵に守られて、彼らから無事逃れることができた。ラホール市内には今や統治者がいないので、六三九 A. H. のジャマーディ・ウル・アーヒル（Jamādi-ul-Ākhir）月の十六日（＝一二四一年十二月二十二日）に異教徒モンゴル人たちは、その

都市を占領し、回教徒を殺戮し或は捕虜とした。この不吉な報せが首都にとどいたとき、スルターン・ムイズ・ウッディーン・バフラーム・シャーはデリーの市民たちを白城〔カスル・ィ・サフィード Qasr-i-Safīd〕に集めた。この文章の著者に彼は命じて演説をなさしめ、市民はスルターンに彼らの忠誠を〔改めて〕誓った。[29]

という有様でラホールは陥落し、首都デリーの市民も恐怖におののいた。バフラーム・シャーはマリク・クトゥブ・ウッディーン(Malik Quṭb-ud-Dīn)をはじめとする将軍たちに兵を授けてラホールに向わしめ、辺境の守備を固めた。モンゴル人はラホール周辺のパンジャーブの中枢部を略奪した後、引き上げたらしいが、一二四五年に再び侵入し、ムルターン(Multān)を経てウーチュ(Ūchchah)に迫った。

当時のスルターンはバフラームの甥にあたるアラー・ウッディーン・マスード('Alā-ud-Dīn Mas'ūd)であった。

この同じ年〔=六四三A.H.〕のラジャブ月〔=一二四五年十一～十二月〕に北方の属州から異教徒モンゴル人の軍隊がウーチュ(Ūchchah)に向っており、その指揮者は憎むべきマングータ(Mangūtah)であるとの報せがとどいた。スルターン・アラー・ウッディーン・マスード・シャーはモンゴル軍を駆逐するために各地からイスラーム軍を集めた。ビーアー(Bīāh)河の岸に彼らが到着したとき、異教徒はウーチュから引き上げつつあり、目的は成功した。本書の著者はこの遠征に際し、近衛軍に参加した。……栄誉あるイスラーム軍の兵員数と装備が異教徒たちに伝えられたとき、彼らは天幕をたたみ、ホラーサーンの方向へ再び退いて行った。[30]

さて、ここで当時の内陸アジアの情勢の推移を眺めてみると、チンギス・ハンの大モンゴル帝国は彼の死(一二二三)とともに彼の諸子の采領に分裂した。東方では第三子太宗ウゲテイが即位したが、彼の没後(一二四一)、皇后トゥラキナが称制し、やがて定宗グユックが汗位に推戴された(一二四六)が、短い治世の後、皇后オグルハイミシュの簾政を経て憲宗メンゲが登位した(一二五一)。中央アジアでは旧カラ・キタイの領土を第二子チャガタイが統治したあと(一二四二没)、孫のカラ・フレーグが継いだが、グユックの干渉をうけて黜けられ、イス・マングがこれに代った(一二四六)。しかし、大汗位継承をめぐって一族が争った

とき、ウゲティ家に加担した彼はメンゲの即位とともに廃せられ、代って再びカラ・フレーグの登位が決ったが（一二五二）、同年歿し、その妃オルガーナが政柄を執った。西アジアでは、さきに落ちぶたファーラズムのジェラール・ウッディーンが西部イーラーンを統一してファーラズム帝国を部分的に回復したのに対し、チョルマガンを将とするモンゴル軍のイーラーン遠征が行なわれ（一二三〇～三一）、遂に第二次ファーラズム国を滅した。チョルマガンの後、太宗の命をうけてバイジュが代ってイーラーン統治にあたることになったが（一二四二）、フレーグが一二五一年のクリルタイで憲宗メンゲよりイーラーンの太守職を授けられ、アラムートのイスマーイール派を滅し、次いでバグダードのアッバース朝カリフを倒し、正式にイル・ハーン国の成立をみることになる（一二五八）。こうした内陸アジアの情勢の推移に対し、北インドのデリー・スルターン政権は無関係ではありえなかった。ファーラズム国は滅亡したが、代ってチャガタイ汗国とイル汗国の圧力を蒙り、モンゴル軍の侵入はますます重大な脅威となりつつあった。マスード・シャーに代ってイルトゥトミシュの末子ナーシル・ウッディーン・マフムード（Nāṣir-ud-Dīn Maḥmūd）が王位についたが（六四四 A. H. Muḥarram 23＝一二四六年六月）、その治世第十二年の一二五七年の終りに、

この年〔六五五 A. H.〕の終りに異教徒モンゴル人の軍隊がホラーサーンからウーチュとムルターン地区に現われた。そこでマリク・イズ・ウッディーン（Malik 'Izz-ud-Dīn）バルバン・イ・カシュル・ハーン（Balban-i-Kashlu Khān）は彼らと和睦し、彼らの指揮者モンゴル人ノヤーン・サーリーン（Noyān Salīn）の軍営に赴いた。新年を迎えて六五六年のムハッラム月に入り、その六日の日曜日にスルターンの軍旗は首都から異教徒モンゴル人に対して聖戦を敢行し、彼らを駆逐するため動き始めた。デリー市の近郊に屯所が設けられた。信頼すべき筋の情報によれば、同月の九日、水曜日に異教徒モンゴルの首領フラークー（Hulāku）はカリフ・ムスターシム・ビィルラー（Musta'ṣim Bi'llah）の軍の前にバグダード（Baghdād）の城門から敗走した。スルターンの軍隊が異教徒に対し戦を挑むため進軍を始めるにあたり、マリクやアミールたちが部隊を率いて各方面に出動した。そしてスルターンの親衛軍の主力はラマザーン月の一日に首都に帰還し、スルターンは五ケ月間そこに留まった。[29]

という事件が起った。モンゴル軍はムルターン城の外郭を傷めたのみで、翌五八年春に引き上げた。このときのモンゴル軍の指揮官はノヤーン・サーリーン、すなわちサリ・ノヤンであり、元史巻三、憲宗紀に、

〔三年癸丑〕夏六月、命諸王旭烈兀及兀良合台等帥師、征西域哈里發八哈塔等国、又命塔塔児帯撒里土魯花等、征欣都思・怯失迷児等国[30]、

とみえている。憲宗の三年癸丑は一二五三 A.D. であり、紀年にずれはあるが撒里土魯花らにヒンドス(欣都思)、カシュミール(怯失迷児)の征服を命じている。

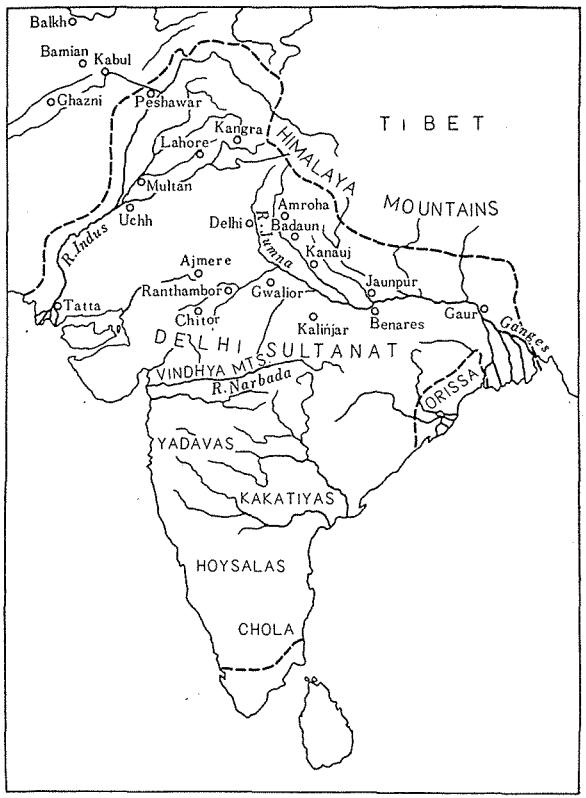
さて、この侵入後暫らくして一二六六年にかってナーシル・ウッディーンの宰相をつとめていたギャース・ウッディーン・バルバン(Ghiyāṣ-ud-Din Balban)が王位についたが、この頃からますますモンゴルの侵入は激しくなって行った。しかし、もとキプチャク(Khifchāk)の奴隷出身の彼は優れた軍事指導者でもあり、よくその脅威を退けた。一二七一年、自からラホールに進出し、先きのモンゴル軍の侵入によって破壊された城塞を修復し、第一皇子ムハンマッドをムルターンに、第二皇子ボグラー・ハーン(Bughrā Khān)をサーマーナ(Sāmāna)に駐在せしめ、西北辺境の守備を固めた。[31] 一二七九年、モンゴル軍はサトレジー河を渡って侵入して来たが、これらムルターン、サーマーナ、デリーからのスルターン軍に挟撃されて退却した。[32] しかし、一二八五年には皇子ムハンマッド・ハーンはラヴィ河を渡りラホールに侵入したイティマル(Itimar)の指揮するモンゴル軍と戦い、戦死した[33](六八三 A.H. Zul-hijjah 月=一二八五年二〜三月)。その直後の一二八七年、バルバンも歿すると、カイクバード(Muiz-ud-Din Qaiqubād)が王位を襲ったが、やがて貴族たちの推戴をうけたハルジー(Khalji)派のジェラール・ウッディーン・フィローズ(Jelāl-ud-Din Firūz)が奴隷王朝に代ってハルジー朝を創建した(一二九〇)。一二九二年に約十万といわれるモンゴルの大部隊がスナム(Sunam)まで侵入して、彼らはスルターンの軍隊に敗北を喫し、退却したが、将校の一人アルグー(Alghū)を始めとする捕虜となった数千のモンゴルの将兵はイスラーム教への改宗を条件に、デリー近郊に居住することを許された。彼らは人々から新ムスリムと呼ばれ、その居住区はモゴール・プールと称されたといわれ

る。その地域はバダーウニー（Badāuni）によれば、今日のニューデリー東南部にあるニザーム・ウッディーン・アウリヤーの霊廟附近であった。すなわち、

六九一年A.H.〔一二九一年十二月二十四日～一二九二年十二月十一日〕、チンギース・ハーンのモンゴル族が大軍をもってヒンドゥースターンに侵入し、スルターンの軍隊とサナーム（Sanām）の近辺で激戦を交えた。モンゴル人たちはヒンドゥースターンの軍隊の規模を知って、和平交渉に入った。スルターンはそこで彼らの指揮官を招いたが、その人物はフラーグ・ハーンの近親のもので、スルターンを父と呼び、スルターンは彼を息子と呼んだ。彼らは会見し、互に贈物を交わし、軍隊を引き上げたが、チンギース・ハーンの孫にあたるアルグー（Alghū）というものはイスラーム教に改宗し、数千の他のモンゴル人たちも彼にならって神聖な祈禱の句を学び、スルターンに仕えるため残留した。アルグーはスルターンの女婿となり、モンゴル人たちは今日、聖ニザーム・ウルアウリヤー（Nizām ul-Auliyā）の墓域――彼の憩の地に神の平安あれ――にあたるギャース・プール（Ghiyās pūr）に住居をあてがわれた。そこはモゴール・プール〔モンゴル人の町の意〕と名づけられ、彼らモンゴル人たちは「新イスラーム教徒」（Nau Musalmān）と呼ばれた。[34]

一二九六年（六九五A.H. Ramazān）、ジェラール・ウッディーンを弑した甥のアラー・ウッディーン（'Alā-ud-Dīn）が王位についたが、この頃からモンゴルの侵入は以前にもまして激しくなった。翌一二九七年秋にモンゴルの侵入があったが、スルターンの部将ウルグー・ハーン（Ulghū Khān）やザファル・ハーン（Zafar Khān）らの活躍でジャーランドゥル（Jālandhur）の近くで撃破した。[35]ところが、即位第三年の一二九八年秋、サルディー Saldī というものに指揮されたモンゴル軍がシヴィスターン（Siwistān）を占領した。ザファル・ハーンが大軍を率いてシヴィスターン攻略に向い、まもなくこれを降し、サルディーとその一族を始め、モンゴル人らを多数捕え、頸枷をはめてデリーに送った。[36]しかし六九八A.H.の終り、すなわち一二九九年の秋には、

この同じ年〔六九八A.H.〕の終りに、クトゥルグ・フォージャ（Qutlugh Khwāja）とその子を始め、二・三千のモンゴル人がマーワラー・ウンナフル（Māwarā-un-Nahr）からヒンドゥースターン征服にやって来た。彼らはインダス河を渡った。そして彼らはこの国土を占領する意図をもっていたので、彼ら



DELHI SULTANAT の最大疆域略図

口過剰に悩まされ、穀物その他の食糧を輸入する途をふさがれ、物価が高騰した。[37]

という有様で、モンゴル軍はこのときは首都の占領とヒンドゥースターン征服をめざし、真直にデリーに向って進んだ。デリー市民は恐怖におののいたが、ザファル・ハーンの率いる右翼軍は勇敢にモンゴルの陣中に突入し、彼らを退却せしめたが、追撃の途中、タルガイ（Targhai）の指揮するモンゴル軍の伏兵に囲まれ、戦死した。彼の死を聞いたスルターンは嫉妬からかえって喜こんだという。[38]

当時チャガタイ汗国はオルガーナ・ハトンの簾政（一二五一～六一）の後、アルグー（Alghū）が統治した。その歿（一二六五～六）後はムバーラク・シャーが即位したがムトゥゲンの孫バラク（Baraq）がフビライの勅書をたてにとり汗位を奪った（一二六六）。しかし彼はカイドゥから圧力を蒙り、その対イル汗戦はかえってイル汗アバカの破るところとなり、まもなく没すると（一二七一）、

の進軍の途中にある村落や都会を破壊・劫掠しなかった。彼らはそれらを彼らの王国の一部分とみなしていたからである。彼らはデリーの〔城門〕前に軍営を設け、包囲戦を開始した。附近の町や村からモンゴルへの恐怖のため非常に多数の住民がデリー市に避難していたので、大混雑を来たし、モスクや、辻、市場、その他の市内の広場に立錐の余地もなかった。人々は人

バラクの子ドゥワ（Dūwa）が汗位についた（一二七四頃）。カイドゥの死後、ようやくチャガタイ汗家はその自由を回復したが、ドゥワは一三〇六年に歿し、クンジュク（Kounjouk）とタリクー（Taliku）の短い治世の後、ケベク（Kebek）が即位したが、彼は北京にいたドゥワの子エセン・ブカ（Esen-bouqa）を迎えて位を譲った。後者の死後、再びケベクが政権をとった（一三二〇頃）。このようにして統治者に転移はあったが、ドゥワによって完全な主権を回復したチャガタイ朝はやがて外部に向って勢力を振い始める。しかし、東、北、西の各方面ではフビライ、ヂュチ、フレーグの各家がすでに確固とした地歩を築いていて、その領土拡張を許さなかったので、専ら南方のアフガーニスターンとインドに向って進路を開いた。しかし、アフガーニスターン西部には土着のクルト（Kurt）朝があり、彼らは東部アフガーニスターンに出て、ここから西北インドへの途をとり侵略を繰り返したのである。一二九九年に侵入したクトゥルク・ファージャーとは東部アフガーニスターンに采領を授けられていたドゥワの子の一人であった。

さて、デリーのアラー・ウッディーンは、このクトゥルク・ファージャーの侵入を退けた後、ラージャスターン（Rajastān）のチトール（Chitor）とランタンボール（Ranthambhor）の征服事業に乗り出したが、そのすきをねらって再びチャガタイ・モンゴルが侵入した。

スルターン・アラー・ウッディーンが遠方の城塞の攻略に従事しており、その地に長期間留まるであろうとの情報がマーワラー・ウンナフルに達したとき、すでに述べたモンゴルのタルギー（Targhī）は大軍を率いてヒンドゥースターンの劫掠にやって来て、デリー近辺のジャムナー河畔に駐営した。しかしスルターンはチトールの攻略を終え、一ケ月前にデリーに帰還していた。もっともスルターンの軍隊の兵士たちは南方のデッカンのアランガル（Arangal）遠征に出かけていて、ランタンボールの征服後、大部分の将軍たちは各自の采邑（jāgīr）へ帰還していたので、スルターンの手許にある軍隊は雨と長期間の遠征のため装備も充分でなかった。スルターンは当惑しながら手勢を率いてデリーを出て、シリー（Sirī）の野に陣を張った。塹壕を掘り、茨をめぐらすなどの防禦手段を構じ、各地から召還した将軍たちの到着を待った。しかしモンゴル人たちがデリーの周辺を占領し、その地保を築いたときまでに将軍たちは彼の許に参集しなかった。あるものはコール（Kol）で、あるも

のはバラン（Baran）で待っていた。こうして二ヶ月経過したが、タルギーは明らかな理由もなくたち去った。デリーの市民たちはこれを聖シャイフ・ニザーム・ウッディーン（Shaikh Nizām-ud-Dīn）――彼の霊廟は神聖なれかし――の法力に帰した。そしてこれを彼の奇蹟の一つに数えた。タルギーは恐慌におち入り、狼狽してたち去ったといわれる。[39]

タルギーとは同じくチャガタイ家の王子の一人であった。この戦の後、アラー・ウッディーンは真剣にモンゴル侵入防衛策にとり組み、各種の改革を実施した。[40] まず、シリーを首都に定め、この地に新宮殿を造営するとともに、破壊された旧デリーの城壁を修復し、モンゴルの侵入ルートに沿って新しく城塞を設け、兵員を常駐せしめ、食糧・武器の供給を確保した。[41] ことに辺境の拠点サーマーナ（Sāmānah）、ムルターン（Multān）、ディバールプール（Dībālpūr）などに精鋭を駐屯せしめた。[42] またモンゴルの騎兵と戦うため強力な常備軍を整える必要を認め、多数の兵員を養うためには重税を課さねばならなかったが、米、麦、塩、砂糖、油などの必需物質の公定価格を定め、安い給料で兵士たちが生活できるようにはかった。[43] また王領地の生産物は首都の穀物庫に貯えて非常時に備え、一般の農夫も農作物を国家によって指定された米穀商に引き渡し、自家の貯えを許さないなど徹底した統制経済を実施した。[44]

これら一連の政策はある程度成功を収めたらしい。ムガール朝の宮廷史家ニザーム・ウッディーン・アフマッドはこれについて、次のように記している。

食糧と兵士の軍装が安価になった後、軍事力は増大した。モンゴル人の侵入と圧政の門戸はこのようにして閉ざされた。モンゴルの軍隊がデリーに向えば、彼らはことごとく捕えられ、殺された。例えば、あるとき、チンギース・ハーンの孫アリーベグ（'Alī Beg）とタルタク（Tartak）が四万騎を伴ってシヴァリク（Sivalik）丘陵の沿辺、アムローハー（Amrohā）めざして侵入した。スルターン・アラー・ウッディーンはマリク・ナヤク・アフル・ベグ（Malik Nayak Akhur Beg）に命じて大軍をもって迎撃せしめた。彼らはアムローハーの領域に入り会戦した。大部分のモンゴル人は殺され、アリー・ベグとタルタクは捕えられ、鉄鎖を首につけられ、捕獲された二万頭の馬とともにスルターンの面前に引き出された。その日スルターンは市から出て、スブハーニー・チャブタラ（Subhānī Chabutara）において閲兵式を催した。軍隊はこの地からインダルパト（In-

darpat）まで二列に整列した。このときアリー・ベグとタルタク・ベグその他の捕虜はスルターンの面前に導かれ、彼らの多くは象の脚下に投げられ、殺された。……

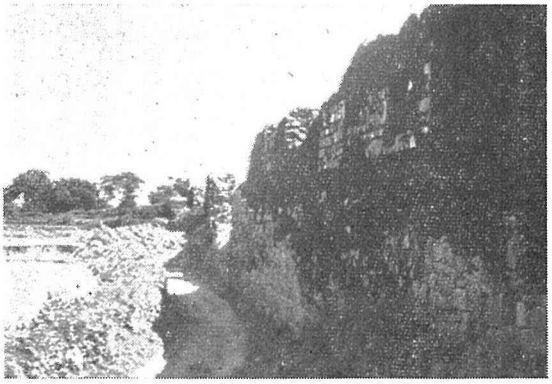
第二回目にはケベク（Kebek）という名のモンゴル人が大軍を率いてハカル（Khakar）の町に現れ、デリーの軍隊と戦った。しかし、彼らの多くは殺され、バダーウーン（Badāūn）門の附近に彼らの頭蓋骨で塔が築かれた。暫らくして、別のモンゴル軍が三万の精鋭をもってシヴァーリク（Siwālik）地方に現れ、その地方で掠奪を始めた。これがスルターンの耳に入ると、彼は大軍を派遣した。この軍隊はモンゴル軍の退路にあたるラーヴィー（Rāvī）河の近くに陣取った。多くの掠奪品を背負ったモンゴル軍がラーヴィー河の岸に到着したとき、デリーの軍隊は勇敢に攻撃し、輝かしい勝利をえた。彼らは多数のモンゴルの将校たちを捕え、近くのタラーイナ（Tarāinah）の城塞中に幽閉した。そして彼らの家族や従者たちをデリーに送り、市場で奴隷として売に出した。その後、マリク・ハース・ハージブ（Malik Khaṣ Ḥājib）はタラーイナに派遣され、捕虜を処刑した。この後暫くして、イクバルマンダ（Iqbalmanda）という名のモンゴル人が大軍を率いてヒンドゥースターンに侵入した。ディハンダ（Dihandah）で彼とデリー軍との間に戦が行われた。そして彼は殺され、他のモンゴル人らは捕えられ、デリーに送られた。そして象の脚下に踏み潰された。その後、モンゴル人の心は恐怖に襲われ、ヒンドゥースターン征服の野望は挫かれた。この国土は彼らの圧迫からクトゥブ・ウッディーン・ムバーラク・シャー（Qutb-ud-Dīn Mubārak Shāh）の治世の終りまで解放された。その当時、ガージー・マリク（Ghāzī Malik）と呼ばれていたスルターン・トゥグラク・シャー（Sulṭān Tughlaq Shāh）はディパールプールとラホールに采邑を受け、モンゴルの疆域に毎年のように軍隊を送り、それらの地方に圧力を加えた。モンゴル人は彼に抵抗することもできず、彼らの国土の境界附近で守備についた。[15]

このようにしてチャガタイ・ウルスのモンゴル軍は一時はデリーの東、アムローハーにまで進出しながらことごとくデリーのスルターン軍にはばまれ、彼らのインド征服戦は成功しなかった。もっともインド側の防衛強化のためばかりではなく、チャガタイ諸王の立場からみれば、もともと西トルキスターンからの長距離遠征であり、しかも当時アフガーニスターン東部の領有をめぐってイル汗のウルジェイトゥーとの抗戦、東方からは仁宗治下の元朝の干渉をうけ、彼らの行動は著しく制約をうけていたことも考えに

入れなければならない。

さて、さきにイスラーム教に改宗し、デリーに定住を許されていたモンゴル人たちは、アラー・ウッディーンの治世晩年の一二九七年に殺戮された。生活苦に堪えかねた彼らがスルターンの出猟中に暴動を企てているとの情報が入ったので、彼は直ちに全員の殺戮を命じ、一日のうちに数千のモンゴル人は殺戮され、家財は没収された。[46] このスルターンの宮廷に仕えた詩人アミール・ホスローによればデリーの新城郭建築の際、

新しい建築には血潮がふりかけられるべきであるとして彼は数千の羊のような鬚をもつモンゴル人たちをその目的のため犠牲にした。[47]



シリー城跡(ニューデリー南郊)

とあるように羊の代りに犠牲に供され、またイクバールの侵入後、

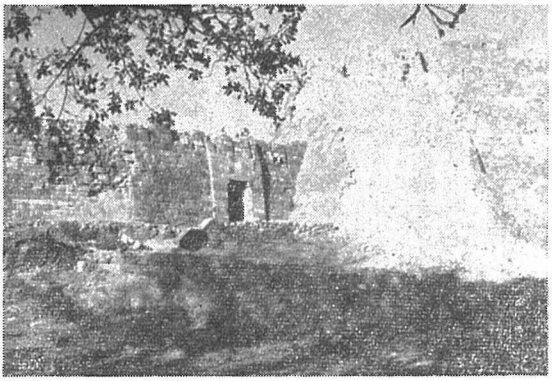
スルターン・アラー・ウッディーンは残っているモンゴル人たちを殺戮し、城壁の中に塗り込めるべきであるとの勅令を発布した。[48]

と伝えられる。彼が造営したシリーの城郭は今日ニューデリーの東南部に城壁の一部が残っている。

こうしてチャガタイ汗国からの侵入は暫くとだえたが、ハルジー朝に代って北・中インドの覇権を握ったトゥグラク朝の二代目の君主ムハンマッド・ビン・トゥグラク・シャー (Muḥammad bin Tughlaq Shāh) の治世(一三二五〜五一)にタルマーシーリーン (Tarmāshirīn) の侵入をうけた。タルマーシーリーンはチャガタイ汗ケベクの後を襲ったエルヂギディ (Eljigidai)、ドゥーワチムール (Dūwa-Timūr) の短かい治世を経て汗位についたもので、再び伝統のインド掠奪遠征を復活したのであった。バダーウーニーに、

七二九 A. H. [一三二八〜二九 A. D.] 年に、以前にヒンドゥー

スターンに侵入したクトゥルグ・フワージャーの兄弟でホラーサーンのモンゴル人支配者タルマーシーリーン（Tarmāshīrīn）が大軍を率いてデリー地方に侵入し、多くの城塞を破壊し、殺戮を行ないながら進み、ラホール、サーマーナ、インダリー（Indarī）を陥し、バダーウーン（Badāūn）の境界に迫った。そこでイスラーム軍と衝突し、彼はもと来た途をとって退却した。スルターンはカーラーノール（Kālānōr）の国境まで追撃し、彼を破った。その地の城の攻略をムジール・ウッディーン・アブーリジャー（Mujīr-ud-Dīn Abūrijā）に委ね、デリーに帰還した。[49]



トゥグラク朝の都城（ニューデリー南郊）

とあり、タルマーシーリーンはデリーの東、バダーウーンまで侵入している。なお、トゥグラク朝第三代スルターンのフィローズ・シャー（Fīrūz Shāh）の治世の七五九 A. H.（一三五七～五八 A. D.）年にモンゴル軍はラホール近辺に迫ったが、なすところなく引上げている。[50] フィローズ・シャーの歿後（一三八八）、トゥグラク朝は王位継承をめぐって混乱に陥っていたが、やがてティームールの侵入（一三九八～九九）を招き、史上有名なジャムナー河畔で十万人の殺戮が行われた。そしてそのティームールの系統をひくバーブルはついにインドの征服に成功し（一五二六）、ムガール帝国を創建したのである。

四　結　語

以上、十三世紀初葉のチンギス・ハン麾下のモンゴル軍のインド侵入に始まり、その後十四世紀にかけてモンゴル族の対インド征服戦の経過を眺めて来た。この間に北・中インドの支配者は奴隷王朝からハルジー朝、トゥグラク朝と交替したが、これらデリーを首都とする一連のトルコ系イスラーム政権、いわゆるデリー・サルタナット歴代の皇帝はモンゴル族の侵入に悩まされた。大局的にみれば、初期のモンゴル軍の侵入は西北辺境の一部は犯されてもインド

の歴史の流れを大きく転換せしめるほどの効果をもたなかった。彼らの主目的はファーラズム朝の打倒と東西交通路幹線の確保にあったからである。しかしながら、その後のチャガタイ汗国の成立とその南進政策はデリーのスルターン政権に少なからぬ脅威を与え、一時はインドもモンゴル族の支配下に置かれるかにみえた。ハルジー朝のアラー・ウッディーンに新経済政策を断行せしめたのも、モンゴルの侵入が第一の動機であった。この傾向はその後十四世紀末にいたり、ティームールの侵入となり、さらに十六世紀になるとその血統をひくバーブルによるムガール帝国の建設へと進んで行く。こうして十世紀以後、すなわちガズニー朝の成立以来、北・中インドの歴史は内陸アジアのトルコ・モンゴル系乃至はアフガーン系民族の活動と密接な関係をもって展開していったのである。

① 元史巻一、本紀一、太祖十四年の条。百衲本、二十a。
② 元史巻一、本紀一、太祖十五年の条。百衲本、二十a。
③ 王国維、聖武親征録校注（蒙古史料校注四種、丙寅季夏清華学校研究院刊）九十二b。
④ 元史巻一、本紀一、太祖十六年の条。百衲本、二十b～二十一a。
⑤ 元史巻一、本紀一、太祖十七年の条。百衲本、二十一a～b。
⑥ 王国維、前掲書、九十四b。
⑦ 王国維、前掲書、九十五a～b。
那珂通世、皇元聖武親征録、（那珂通世遺書所収、校正増注本）一二一～三〇頁。
⑧ 白鳥庫吉、音訳蒙文元朝秘史、続集巻一、三十六b～三十九b。四部叢刊本、元朝秘史、続集巻一、三十八b～三十九b。那珂通世、成吉思汗実録、改訂版、四二三～四二八頁。Erich Haenisch; Die Geheime Geschichte der Mongolen. Leipzig, 1948. S. 129.
⑨ J. A. Boyle; The History of the World-Conqueror. 2 vols., Manchester, 1958. vol. 1, pp. 133-38.
⑩ H. G. Raverty; Tabakāt-i-Nāṣiri: A general History of the Muhammadan Dynasties of Asia, by The Maulānā Minhāj-ud-Din Abū-'Umar-i-'Uṣmān. 2 vols. London, 1881. vol. 2, pp. 1012-23. Text: (Bibliotheca Indica Series), Calcutta, 1864. pp. 348-49.
⑪ Rashid-ud-Din; Jāmi' ut-Tawārikh(Berezin I. N.: Sbornik lietopisei. Istoriya Mongolov sochinenie Rashid-Eddina. Trudy Vostoch. Otdiel. Imp. Russ. Arkh. Obshch., Chast. V, St. Petersburg, 1858. pp. 125-28.) cf. Jāmi'ut-Tawārikh ed. by Bahman Karmi, 2 vols. Tehran, 1338. vol. 1, pp.375-76.
⑫ H. G. Raverty; Op. cit., vol. 1. pp. 609-10.
⑬ ジェズジャーニー（H. G. Raverty; Op. cit., vol 1 pp. 293-94）によれば、ジェラール・ウッディーンはまずウーチェとムルターンに向い、そこからキルマーン（Kirmān）地区に入り、やがてファールス（Fārs）に着いた。
⑭ Rashid-ud-Din (Berezin): Op. cit. pp. 128-30.
⑮ 王国維、前掲書、九十六a～b。
那珂通世、皇元聖武親征録校注。一二一～三〇頁。

⑮ Rsahīd-ud-Dīn (Berezin); Op. cit. p. 131. Tehran vol. 1, p. 378.

⑯ Rashīd-ud-Dīn (Berezin); Loc. cit. Juwainī (Boyle); Op. cit., vol. 1, pp. 137–38.

⑰ Juzjānī (Raverty); Op. cit., vol. 2, pp. 1045–46.

⑱ 長春真人西遊記、（王国維、蒙古史料四種校注所収）。四十一b～四十二b。

⑲ ibid., 二十b。E. Bretschneider; Medieval Researches from Eastern Asiatic Sources. London, 1910, vol. 1, p. 51. n. 120.

⑳ 王国維、聖武親征録校注（前掲書所収）、九十六b～九十七b。

㉑ 那珂通世、皇元聖武親征録校注。（前掲書所収）、一二二頁。

㉒ 岩村忍、塔里寒考（『東洋史研究』十五巻一号所収）三六―四二頁。

㉓ Juwainī (J. A. Boyle): Op. cit., vol. 1, p. 135.

㉔ Juzjānī (H. G. Raverty); Op. cit., vol. 1, p. 609.

㉕ Juzjānī (H. G. Raverty); Op. cit., vol. 1, pp. 1295–96.

㉖ Juzjānī (H. G. Raverty); Op. cit., vol. 1, pp. 655–56.

㉗ Juzjānī (H. G. Raverty); Op. cit., vol.1, pp. 667–68. vol. 2, p. 809.

㉘ Juzjānī (H. G. Raverty); Op. cit., vol. 1, pp. 711–12.

㉙ 元史巻三、本紀三、憲宗三年の条。百衲本、五a。
なお、サリ・ノヤンの侵入については、アブール・ファズルの「アクバル会典」にも言及されている。Abūl-Fazl; 'A'in-i-Akbarī (H. S. Jarrett and J. Sarkar; 'Ain-i-Akbarī, vol. III, Calcutta, 1948. p. 383.)

㉚ 'Abdu-l-Qādir al-Badāonī; Muntakhabu-t-Tawārīkh(translated and edited by G. S. A. Ranking, Calcutta, 1898) vol. 1, pp. 186–87. Nizām-ud-Dīn Aḥmad; Tabaqāt-i-Akbarī (translated by B. De, Calcutta, 1927) vol. 1, pp. 107–08.

㉛ Ziyā-ud-Dīn Barnī; Ta'rīkh-i-Ferūzshāhī, ed. by S. Aḥmad Khān, Calcutta, 1862, pp. 80–81.

㉜ Badāonī (G. S. A. Ranking); Op. cti., vol. 1,p. 188.
Nizām-ud-Dīn Aḥmad(B. De); Op. cit., vol. 1, pp. 115–18.

㉝ Badāonī (G. S. A. Ranking); Op.cit., vol. 1, p. 236.
Nizām-ud-Dīn Aḥmad (B. De);Op. cit., vol. 1, p. 143.
Barnī; Op. cit., pp. 218–19.
Ferishtah; Ta'rīkh-i-Ferishtah. Lucknow, 1874. p. 94.

㉞ Barnī; Op. cit., p. 250.

㉟ Badōnī; Op. cit., vol. 1, pp. 249–252.
Nizam-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, p. 158.

㊱ Nizām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, p. 158.

㊲ Nizām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, pp. 159–60.

㊳ Nizām-ud-Dīn;Op. cit., vol. 1, pp. 173–74.

㊴ アラー・ウッディーンの新経済政策については、Dharam Pal; 'Alā'-ud-Din's Price Control System. (Islamic Culture, Hyderabad-Dn., 1944, Jan. pp. 45–52.); P. Saran; The Economic Policy and Price Control of Alauddin Khalji. (Studies in Medieval Indian History, Delhi, 1952, pp. 147–87.) 参照。

㊵ Nizām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, p. 174.

㊶ Nizām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, p. 180.

㊷ Nizām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, pp. 174–78.

㊸ Nizām-ud-Dīn Loc. cit.,

㊹ Nizām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, pp. 179–80.
なお、アラー・ウッディーンの辺境政策については、Dharam Pal; 'Alā-ud-Dīn Khiljī's Mongol Policy.(Islamic Culture, Hyd-

erabad-Dn. 1947, July, pp. 255-63.); P. Saran; The Frontier Policy of the Turkish Sultans of Delhi.(Studies in Medieval Indian History, Delhi, 1952. pp. 188-222.) 参照。

㊻ Badāonī; Op. cit., vol. 1, p. 254.

㊼ Niẓām-ud-Dīn; Op. cit.,vol. 1, p. 184. Amīr Khusrū; Ta'rīkh-i-'Alai (H.M. Elliot and J. Dowson; The History of India as told by its own Historians. Calcutta, 2nd. Ed. 1954. pp. 71-97.) p. 74.

㊽ Amīr Khusrū; Op. cit., p. 78.

㊾ Badāonī; Op. cit., vol. 1, p. 305.

㊿ Niẓām-ud-Dīn; Op. cit., vol. 1, p. 246.
Badāonī; Op. cit., vol. 1, p. 328.

The Mongolian Invasion into India in the 13th and 14th Centuries

by

Toshiyuki Etani

From the invasion of the Mongolian army under Chinggis-Khan at the beginning of the 13 th century, the Mongolian made a repeated raid on the north-western India till the 14 th century. The first invasion was projected to dissolve the Khwārizm-Shāh dynasty and to secure the possessory right of the principal road between East and West, happened to reach the bank of the Indus in pursuit of the south-routing Khwārizm-Shāh king. Soon, with establishment of the kingdom of Chaghatai-Khan, the Mongolian started the earnest invasion to India and threatened the back of Sultanat in Delhi, the development of which this article tries to trace with the examination of its historical importance.

Saint-Simon, Fourier and Owen

——A Comparison between French and English Socialist Thinkers——

by

Toshio Horii

Saint-Simon, Fourier and Owen were almost contemporary socialist thinkers in France and Great Britain, and up to this time these three have been regarded as "Utopian socialists", and especially Fourier and Owen as "assosiationist socialists". But, when their ideas are examined, their shades of opinion lead us to another interpretation. Though they thought of the protection of laborers, the difference between Saint-Simon and Owen is great; in spite of the same plan of utopia, their attitude fowards the actual society was differet. On the other hand, the fellow countrymen, Saint-Simon and Fourier, have many points of similarity in their social thoughts.

This article presents that their own ideas reflect in turn the fate